

感傷主義的建築

-普段は想いを馳せない自分の感情や記憶との邂逅を果たす空間-

21819037 山口 早紀子  
指導教員 宮 晶子 准教授

感傷主義 小・中学校 自己との対話  
いじめ 空想 内密空間

1. はじめに

感傷主義とは、理性や意志よりも個人の感情面に支配される傾向の総称である。ある実空間において、感情や空想が大きく膨らみ、自己との対話が生じることがある。例えば、幼い頃に押入れの重みある襖をそっと開けると、そこには仄暗い空間が広がっていた。身を屈めてそこに入ると周囲の世界が遠のく一方で自分だけの世界が広がるように感じ、隠れ家のような親密さを覚えた。このような経験がある人は少なくないのではないだろうか。その時、私は押入れという収納としての機能面や実際の大きさを客観的に理解していたのではなく、主観的にその空間を捉えていた。私は、それを「感傷主義的空間」と呼ぶことにする。そして、現在はそのような空間が家や都市から減少していると感じる。様々な空想が広がり複合的な感情が生まれうる「感傷主義的空間」の性質と必要性を考察し、小・中学校及び特別支援学校を設計する。

2. 思春期といじめ問題

2-1 思春期における心理変化

思春期とは、心身ともに子供から大人に変化する時期であり、一般的におよそ 12 歳から 17 歳頃までを指す。思春期には親からの心理的な独立を目指すとともに、自己の内面に関心が向き、自我同一性の形成などの心理的変化が訪れる。同時に、進学により周囲の環境や友人関係が急速に変化する時期でもある。それらの要因がストレスとなり、悩みや不安、孤独感を抱えやすくなる。その発散口のひとつとして発生する現象がいじめであり、近年の小・中学校における大きな社会問題となっている。

2-2 いじめについて

図 1 のように近年いじめの認知件数は急増しており、小学校における件数は全体の大部分を占める。また、不登校生徒数は中学 1 年生を境に急増する。

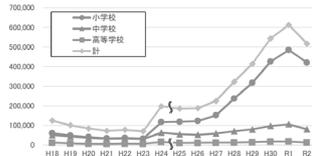


図 1 いじめの認知件数の推移

以上のように、小・中学生が抱える目まぐるしい環境変化及び心理変化という個人問題がいじめという大きな社会問題へと発展する。しかし、自分でも理解できないような不安や感情を見つめ直す時間や空間が現代社会には少ない。そこで、小・中学生には「感傷主義的空間」が必要であると考え、自らの存在を充足することができる建築を提案する。

3. 感傷主義的空間の分析

3-1 『空間の詩学』から分析する感傷主義的空間

感傷主義的空間とは、自らの感情や空想が膨らむ空間である。ガストン・バシュラールは『空間の詩学』の中で、空想を生み出す空間において、内密性が重要であると説く。内密空間とは表沙汰にはならず半ば閉ざされた空間であり、身を置くと安心感を得られ、自己の内側に関心が向く。このような内密の空間では空想の部屋が建築され、豊かな空間体験が発生する。また、バシュラールは空想をすることによって、普段の世界から逸脱して離れ、その空想力によって無限に広い別世界へと行くことができると述べている。以上より、感傷主義的空間はバシュラールの言う内密性を孕み、今いる世界とは別次元にある世界に目を向けることができる空間と言える。したがって、感傷主義的空間は「普段は想いを馳せない自分の感情や記憶との邂逅を果たす空間」と再定義することができる。

3-2 実空間から分析する感傷主義的空間

私が実際に「感傷主義的である」と感じた空間の写真を図 2 として並べる。



図 2 感傷主義的である実空間の例

これらの写真を分析すると、表 1 で示す特徴が読み取れる。

写真	特徴
(a) 押入れの中	自分だけの世界が創造される
(b) ヴェネチアの風景	規則性を持たない風景が常に移り変わっていく
(c) 建物の隙間	内密空間の中に、一步踏み入れられる路地を発見する
(d) 高台から見る風景	他者が生活している実感を得る
(e) 昼間の浴室	普段見慣れている情景とのギャップを感じる
(f) 誰もいない教室	
(g) 光が射すトンネル	奥行の先に未知への想像力が刺激される

表 1 感傷主義的空間の分析

以上の特徴から、「感傷主義的空間」には空間を主観的に捉えることが必要であり、その主観性が空想や自己との対話を広げることにつながる。

#### 4. 提案

##### 4-1 敷地選定

小・中学生が毎日同じ家と学校を往復する中で、最も景色の変化や発見が生じやすいのは通学路である。大泉学園町は関東大震災の被害に伴う住宅需要に対し、図 3 のような従来の地形を無視した宅地開発が行われ、同じ幅と長さの道路による区画が広範囲に渡って繰り返されており、似たような景色が広がる。



図 3 東京都 大泉学園町の歴史 (1920s→1930s→1960s)

また、駅までのアクセスは車両が主流であり、徒歩による生活圏は格子状の区画内部にほぼ収まる。したがって、この区画に暮らす小・中学生は感傷主義的空間に出会う機会が少なく、自らの感情と向き合う時間が希薄になっていると考察する。また、それは自分の実体験でもある。

##### 4-2 設計手法

格子状の住宅街の北西には、格子グリッドを持たず従来の地形に沿って整備された有機的な区画が見られ、感傷主義的空間が現れる余地がある。したがって、



図 4 敷地周辺図

その区画に面した小・中学校および特別支援学校を建て替えることとする。一方で、敷地北側には人工的に引かれた道が通る。この道を元に敷地に格子グリッドを配置して格子状住宅街との共通項を生み出し、本提案での経験が住宅街全体に影響を与えるよう計画する。

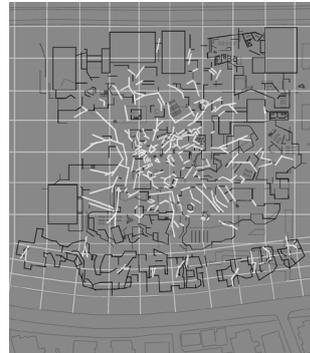


図 5 グリッドとシワ

主観的な空間認識を生むにあたり、先の見通せなさを生じさせる不規則な壁配置を、全体を構成するためのグリッドにシワのように織り込み、感傷主義的空間を配置する。その具体例として、黒板裏に隠れた秘密基地や建物の細い隙間に現れる階段、他者の存在を感じられる高台やスロープ、奥行を感じられるトンネル的空間などがある。外部空間としては、内部空間に入り組みながら干渉する路地的空間や壁に囲われた中庭などを配置する。また、学校と地域を繋ぐことを目的として、グリッドの南面を地域の既存街路に向けて扇状に開き、それに従って地域と学校を結ぶブロックを配置する。このブロックでは、児童の作品展示室や園芸広場と連携する花屋など、学校と関わりのある地域に向けたプログラムを展開する。これによって、地元住民が学校に積極的に関わる機会が生まれ、学校の感傷主義的空間がまちの一部としても作用する。

#### 5. まとめ

思春期という特別な時期にある小・中学生に、学校という毎日足を運ぶ場所を利用して大規模で他にない感傷主義的空間を与え、心の拠り所を提案した。この学校が地域に開くことで、地元住民と小・中学生との交流が生まれるとともに、地元住民が感傷主義的空間を生活の一部として経験する。そして、普段は想いを馳せない自分の感情や記憶との邂逅を果たし、地元住民にとっても大きな拠り所となって、人々の主観的な思い入れとともに記憶されていく。この提案をきっかけに、まちにもそのような場所が少しずつ広がっていくとともに、人々がまちに潜む、既存の細やかな感傷主義的空間を発見する力を身につけていくことを期待する。

##### 【主要参考文献】

- ・ガストン・バシュール著、岩村行雄訳、『空間の詩学』ちくま学芸文庫、2002
- ・『令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』文部科学省、2020
- ・谷 謙二、「今昔マップ旧版地形図タイル画像配信・閲覧サービスの開発」、GIS-理論と応用 25(1)、1-10、
- ・稲垣実果、「思春期・青年期における自己愛的甘えの発達の变化-自我同一性との関連から-」教育心理学研究、2013、61、56-66